様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2017～2020
課題番号：１６ＫＫ００６４

研究課題名（和文）思いやり目標と自己イメージ目標が向社会的行動に及ぼす影響の日米比較（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Compassionate and self-image goals as determinants of prosocial behaviors (Fostering Joint International Research)

研究代表者
新谷　優（Niiya, Yu）

法政大学・グローバル教養学部・教授

研究者番号：２０５１１２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,800,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は，日本人がアメリカ人ほど見知らぬ他者に対して援助行動をとらないのは，他者が援助を希望しているのか確信が持てないためであること，また，相手に悪い印象を与えたくないという動機が強いためであることを明らかにした。さらに，日米両国において，他者の幸福を高めたいという動機が強い人（思いやり目標をもつ人）ほど，見知らぬ他者に対して援助をすることや，友人の援助に費やす時間が長いこと，非ゼロサム的な時間の捉え方（人のために費やす時間は自分のための時間でもあるという捉え方）をすることがわかった。なお，非ゼロサム的な時間の捉え方をする人ほど，援助に対する満足感，時間のゆとり，人生の満足感が高かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで援助行動の文化差は，国の豊かさや内集団を大事にする度合いなど，国レベルの変数で説明されてきたが，本研究では個々人の状況の捉え方の文化差によって説明したところが学術的な貢献である。また，対人場面における個人の目標が援助行動に関係していることがわかったが，目標は変化しやすく，個人の心がけによってある程度コントロールできる。近頃は，目の不自由な人のホーム転落事故や，乳幼児の虐待事件など，他者から少しの援助があれば助かる命が失われている。援助を必要とする人が援助を要請するとは限らない。援助の要請がない状況において，援助行動を増やすための施策につなげることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This research found that Japanese are less likely than Americans to help a stranger because (1) Japanese are less certain that their help is wanted or needed and (2) Japanese have a higher motivation than Americans to avoid appearing incompetent or unlikable. In both the U. S. and Japan, those who were more motivated to support others' well-being (i.e., those with compassionate goals) were more likely to help a stranger, spent more time helping friends, and were more likely to perceive time as a nonzero-sum resource (i.e., perception that time spent on others is also time spent on oneself). People who perceived time as nonzero-sum achieved more satisfaction from helping friends , experienced less time pressure, and reported higher life satisfaction.

研究分野：社会心理学

キーワード：思いやり目標　自己イメージ目標　援助行動　文化　時間

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

相互協調性を重視する日本社会では、他者に思いやりを持つことが文化的な規範であるにも関わらず、日本人はアメリカ人に比べ，見知らぬ他者に対して援助をしない。特に近年の日本では，目の不自由な人のホーム転落事故や，乳幼児の虐待事件など，他者から少しの援助があれば助かる命が失われている。Charity Aid Foundation (2018) によると,「過去一カ月のうちに見知らぬ他者を助けたことがある」と回答した者の割合の世界ランキングは，アメリカの 10 位に対し，日本は 145 か国中 142 位である。本研究は，日本人がアメリカ人ほど見知らぬ他者に対して援助行動をとらない理由を明らかにし，さらに援助行動を促進するための要因をつきとめることを目的とした。

まず，日米間の援助行動の文化差に関しては，見知らぬ他者を援助する場面においては，他者が援助を必要としているのか，状況が不明確であることが多いことに着目した。援助の必要性が不明確である場合，人は援助を躊躇う（Wilson, 1980）。東アジア文化圏の人々は欧米文化の人々よりも，状況に注意を払い（Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001），その場の規範に応じて行動を決定する傾向がある（Riemer, Shavitt, Koo, & Markus, 2014）。そこで，日本人は状況から援助の必要性を読み取ろうとするものの，情報が不十分であるために行動が取りづらくなっていると考えた。一方，アメリカ人は状況よりも個人の意思・価値観によって行動を決める傾向があるため（Riemer et al., 2014），状況が曖昧な場合であっても，個人が援助したいと思えば援助行動を決断するのに十分であり，援助行動が起こりやすいと考えた。援助行動の文化差に関しては，これまで国の豊かさ（Levine, Norenzayan, Philbrick, 2001）や，内集団を大事にする度合い（Knafo, Schwartz, & Levine, 2009; Smith, 2015），不確実性回避の度合い（Smith, 2015）などが要因として検討されてきたが，状況の捉え方が文化によって異なることや，援助行動を規定する要因に文化差があることを検討した研究は存在しなかった。

また，日米間の援助行動の文化差および個人差を説明する要因として，本研究では対人関係において個人が目指す目標に着目した。人は対人関係において，他者に良い印象を与えようとすることを目指す（自己イメージ目標をもつ）こともあれば，他者の幸福を高めることを目指す（思いやり目標をもつ）こともある (e.g., Crocker & Canevello, 2008)。他者のためになる行動をする場合，思いやり目標をもつ人は「他者のためになるか」を基準に行動するのに対し，自己イメージ目標をもつ人は「自己のためになるか」を基準に行動する。他者に感謝されることが明らかな場合は，いずれの目標も行動を促進するが，他者に感謝されなかったり，批判される可能性がある場合は，思いやり目標は行動を促進する一方，自己イメージ目標は行動を抑制することが予測される。この仮説を支持する研究がある。自己の所属する集団に対して異論を述べることは，集団が決断を熟考するのに役に立つものの，自己が批判されるリスクを伴う。Niiya, Jiang, & Yakin (2021) では，思いやり目標を持つ人ほど，集団のために異論を表明するのに対し，自己イメージ目標を持つ人は異論を避けることが示されている。本研究で扱う援助場面は，他者に感謝されるか，お節介と批判されるか不確実な状況であることから，自己イメージ目標をもつ人ほど援助を躊躇い，思いやり目標をもつ人ほど援助を申し出やすいと考えた。

２．研究の目的

(1) 見知らぬ他者に対して援助を申し出る程度に日米間で文化差があるかを確認し，援助の必要性の知覚が援助の文化差の要因であるかを調べる。具体的には，他者が援助を希望しているか，援助が他者の役に立つのか，の2点について確信が持てないことが，日本人の援助傾向の低さの理由であるかを検証する。
(2) 対人目標（個人が対人関係の中で何を心がけているか）が日米間で異なることが，援助の文化差の要因であることを明らかにする。
(3) 日米両国において，対人目標の一つである思いやり目標（他者のためになることをしようとすること）が不確実な状況でも見知らぬ他者への援助を促進するかを検証する。
(4) 思いやり目標をもつ人は，非ゼロサム的な時間の見方をすることにより，他者のために時間を費やしても幸福感が高いか検証する。

３．研究の方法

目的(1)～(3)を達成するために，以下の研究 1～4 を行った。

研究 1：日本人 222 名とアメリカ人 203 名に見知らぬ他者を助けた状況を描いたシナリオを見せ，援助が成功した，失敗した，成功・失敗の情報なしの 3 通りのエンディングのいずれかを提示した。その後，自分の援助がどのくらい相手の役に立ったと思うかを評定させた。

研究 2：日本人 103 名とアメリカ人 113 名に対し，「道端で転んでいる人を助けなかった」というシナリオを提示し，その理由を想像して記述してもらい，状況の不明確さを挙げている参加者の割合を算出した。

研究 3：日本人 1590 名とアメリカ人 598 名に対し，満員電車に「妊婦に見える女性」が乗ってきた場合，席を譲る可能性について尋ねた。この時，その女性が妊婦である可能性を 10%から 100%まで 10%刻みに変化させ，援助の必要性の明確さを操作した。

研究 4：日本人 402 名とアメリカ人 401 名に対し，援助の必要性が明確または不明確なシナリオを提示し，見知らぬ他者にどのくらい援助を申し出る可能性があるか，相手がどのくらい援助を必要としていると思うか，自分の援助がどのくらい相手の役に立つと思うかをたずねた。

上記の 4 つの研究においては，援助のシナリオを提示する前に，対人目標を測定する尺度にも回答してもらった。

目的(4)に関しては，以下の研究 5～7 を行った。

研究 5：対人目標と他者への援助の関係を調べるための調査をアメリカ人成人（189 名），アメリカ人大学生（254 名）および日本人成人（307 名）を対象に行った。対人目標を測定した上で，友人が援助を必要としている状況をシナリオで提示し，友人に対して自分の時間をどのくらい相手のために使うかを援助の指標として測定した。

研究6：日本人280人，アメリカ人324人を対象にしたウェブ実験を実施した。対人目標を測定後，友人を助けるために多くの時間を費やした状況を描いたシナリオを用い，友人が感謝する場合とお節介だと批判する二つのエンディングのいずれかを提示した。その後，時間の捉え方や，援助に対する満足感をたずねた。

研究 7：日本人 148 人を対象に経験サンプリング法で一週間毎日 5 回ずつ，その時点での対人関係での思いやり目標，非ゼロサム的な時間の捉え方，時間のゆとり，人生満足感をたずねた。

４．研究成果

(1) 以下の 4 つの研究で目的(1)を達成した。研究１では，日米の参加者に見知らぬ他者を助けた状況を描いたシナリオを見せたところ，援助が成功した場合においても，日本人はアメリカ人ほど自分の行動が他者の役に立ったと感じていないことが明らかになった。研究 2 では，日米の参加者に「道端で転んでいる人を助けなかった」というシナリオを提示し，その理由を想像して記述してもらったところ，アメリカ人は自分または相手に原因があるとしたのに対し，日本人は状況によるものであると回答していた。特に，日本人の方がアメリカ人よりも援助の必要性について言及する割合が多かった。日本人が他者に対して援助を申し出るには，援助の必要性が状況から明確に読み取れる必要があることを示す結果となった。さらに研究 3 では，援助の必要性の明確さを操作したところ，援助の必要性が不明確な状況ほど文化差が大きく，援助の必要性が明確な状況では文化差がなくなることが明らかになった（図 1）。研究 4 では，不明確な状況では援助を申し出る程度に文化差が生じ（図 2），さらに，日本人がアメリカ人ほど自分の援助が相手に利益をもたらさないと考えていることが文化差の理由として明らかになった。以上の４つの研究により，日本人の方がアメリカ人よりも見知らぬ他者に対して援助を躊躇すること，その文化差は，日本人の方がアメリカ人よりも，援助が必要かどうかを状況から読み取ろうとしていることが要因であることが明らかになった。

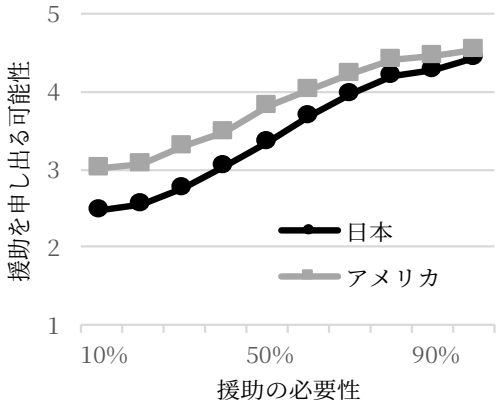

図１ 日本人とアメリカ人が援助の必要性ごとに援助を申し出る可能性（研究 3）

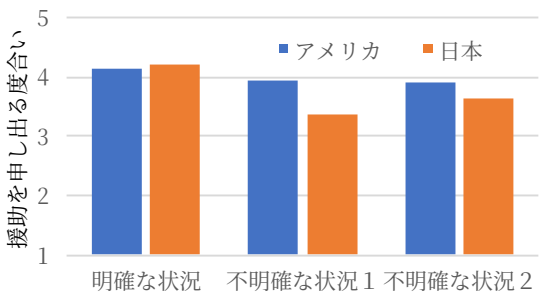

図２ 援助の必要性が明確･不明確な状況において日本人とアメリカ人が援助を申し出る度合い（研究 4）

(2) 目的(2)を達成するため，研究 4 の対人目標のデータを分析した。日本人の方がアメリカ人よりも回避的自己イメージ目標（相手に自己の悪いイメージを与えないようにすること）をもつ傾向があり，これが日米の援助傾向の文化差を説明することがわかった。思いやり目標（他

者のためになることをしようとすること）や接近的自己イメージ目標（他者に自己の良いイメージを与えようとすること）は援助意図の文化差を説明しなかった。さらに，日本では思いやり目標の高い人ほど相手が援助を必要とし，援助が他者にとって良い影響があり，自己にとって悪い影響がないと考える傾向が強く，これらが援助意図を予測することがわかった。一方，回避的自己イメージ目標に関しては，この目標をもつ人ほど相手は援助を必要としていないと考える傾向があり，これが援助意図を弱めていた。日本において見知らぬ他者に対する援助を促進するには，思いやり目標を促進し，回避的自己イメージ目標を抑制することが効果的である可能性が示唆された。

(3) 目的(3)を達成するために，見知らぬ他者に対する援助を促進する要因として，個々人の持つ対人目標に着目し，研究3のデータを分析した。日米両国において思いやり目標をもつ人ほど，見知らぬ他者に援助を申し出る傾向があることがわかり，これは援助の必要性が不明確な状況でも確認できた。一方，自己イメージ目標は日本では援助の必要性が明確な状況でのみ援助を促し，アメリカでは援助の必要性に関わらず，援助を促さないことがわかった。また，研究4のデータを再分析したところ，日米両国において，思いやり目標をもつ人ほど，援助は自分のためにも，他者のためにもなると考え，自分に負担がかからないと考える傾向が強く，これらの考え方がそれぞれ援助を促進していた。他者に好かれようとする人も，援助は自分のためにも，他者のためにもなると考えることにより，援助を促進する傾向が見られたが，他者に好かれようとする目標の効果は思いやり目標の効果よりも弱かった。一方，他者に嫌われないようにする人や，他者に有能だと思われようとする人は，援助は自己に負担があると考える傾向が強いため，援助をしないことがわかった。

(4) 目的(4)のために研究 5 を実施したところ，日米のどのサンプルにおいても思いやり目標の高い人ほど非ゼロサム的な時間の捉え方（人のために費やす時間は自分のための時間でもあるという捉え方）をし，また，友人の援助に費やす時間が長かった。自己イメージ目標に関しては，サンプルにより異なった結果となり，さらなる検討が必要であることがわかった。研究 6 では，援助を受けた友人が援助をお節介だと批判するシナリオを提示した場合でも，日米両国において，非ゼロサム的な時間の捉え方をする人ほど援助をしたことに満足感を得ていた（図 3）。一方，自分の時間を人に捧げたと感じる人や，人に時間を取られたと感じる人ほど，援助に対する満足感は低くなっていた（図 4）。援助を受けた友人が感謝をするシナリオを提示した場合は，友人が批判する場合よりも，援助に対する満足感は高いが，時間を捧げたと感じる人ほど，満足感が高く，時間を取られたと感じる人ほど満足感は低かった。非ゼロサム的な時間の捉え方は満足度とは関係が見られず，一様に満足度は高かった。つまり，援助に対する満足感は，非ゼロサム的な時間の捉え方をする人ほど，援助に対する友人の反応に影響されないこと，時間を他者に捧げていると感じる人ほど，友人の反応に影響されること，時間を他者に取られたと感じる人ほど友人の反応に関係なく満足感が低いことが明らかになった。さらに研究 7 では，日本人 148 人を対象に経験サンプリング法で一週間毎日 5 回ずつ，その直近の対人関係での思いやり目標，非ゼロサム的な時間の捉え方，幸福感をたずねたところ，人はある時点で思いやり目標が高くなると，非ゼロサム的な時間の捉え方をする傾向も高く，時間にゆとりを感じ，幸福感も高いことがわかった。以上の結果から，思いやり目標の高い人は，他者のために時間を使う傾向があるものの，他者のために費やす時間は自分のための時間でもあると考える傾向があり，援助に対する満足感は他者の反応に影響されずに高いことから，他者の反応を気にせず援助を申し出やすくなると結論づけた。

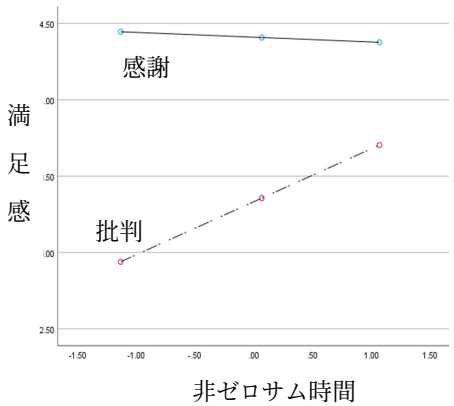

図 3　友人が援助後に感謝または批判をした場合の非ゼロサム的な時間の捉え方と援助に対する満足感（研究 6, アメリカのデータ）

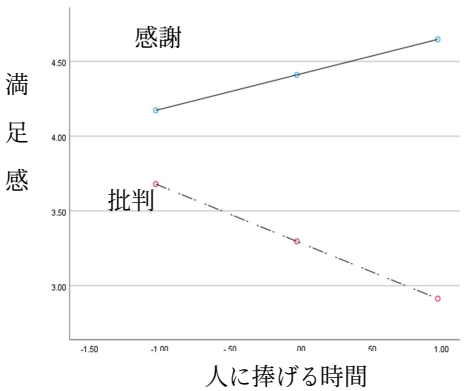

図 4　友人が援助後に感謝または批判をした場合の，人に時間を捧げたという知覚と援助に対する満足感（研究 6, アメリカのデータ）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Niiya, Y., & Crocker, J.	４．巻 10
２．論文標題 Interdependent = compassionate? Compassionate and self-image goals and their relationships with interdependence in the United States and Japan.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Frontiers in Psychology	６．最初と最後の頁 192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2019.00192	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Niiya. Y., Jiang, T., & Yakin, S.
２．発表標題 A compassionate nail sticks out despite the fear of getting hammered down.
３．学会等名 Asian Association for Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Niiya. Y.
２．発表標題 Why aren’t interdependent Japanese helpful to strangers?
３．学会等名 Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yakin, S. & Niiya, Y.
２．発表標題 Interpersonal goals predicting ingroup dissent expression.
３．学会等名 Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Niiya. Y.
２．発表標題 Helping a stranger in Japan: Who helps and why?
３．学会等名 Conference on Psychology and the Behavioral Sciences（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Niiya, Y.
２．発表標題 Wanting to appear supportive does not predict helping when the need of help is unclear
３．学会等名 Association for Psychological Science（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Niiya, Y.
２．発表標題 Are people with interdependent self-construals more compassionate?
３．学会等名 Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	マーカス　ヘーゼル (Markus Hazel)	スタンフォード大学・心理学部・教授	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
その他の研究協力者	クロッカー　ジェニファー (Crocker Jennifer)	オハイオ州立大学・心理学部・教授	
その他の研究協力者	ジャン　タオ (Jiang Tao)	オハイオ州立大学・心理学部・博士後期課程	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	スタンフォード大学			
米国	オハイオ州立大学			